

生活科

有島 智美

1 生活科における深い学びをする子供とは

生活科における深い学びをする子供とは、思いや願いをもって対象と繰り返し関わり、身近な生活に関する見方・考え方を生かして試行錯誤する中で、自分のよさや可能性を見いだす子供である。

(1)「思いや願いをもって対象と繰り返し関わる」とは

「思いや願いをもって対象と繰り返し関わる」とは、導入の段階では漠然としていた思いや願いが、実際に対象と繰り返し関わることで、自分の思いや願いをはっきりさせたり膨らませたり、実現に向けての具体的な見通しがもてるようになっていたりすることである。そして、「思いや願いをもって対象と繰り返し関わる」ことで生まれる気付きや生活経験、学習経験が、自分の思いや願いを達成するための支えとなっていく。対象と繰り返し関わりながら、気付きを増やしていくことが、自分の問題の解決につながるのである。

第1学年「がっこうだいすき！」の学習では、導入で2年生主催の学校スタンプラリーを行い、子供は「今度は自分たちの力だけで学校を探検したい」という願いをもった。直後の学校探検では「どんな教室なのだろう」「どんなものがあるのかな」と、ドキドキしながら各教室を探検した。その探検をしながら、「これは何に使うのかな」「これは何のためにあるのかな」と、具体的に調べたいことがはっきりし、その解明に向けてさらに探検を重ねた。その中で、どのように調べたらよいか、誰に聞いたらよいか、自分の問題解決の見通しをもち、自分たちの「はてな」の答えを自分たちで獲得できた。すると、「今度は2年生に教えてあげたい」と願いを膨らませていった。学校探検を繰り返すうちに自分の調べたいことがはっきりし、さらに繰り返し問題解決を行うことで、学校について詳しく知ることができ、それを発信したいという意欲につながった。このように、実際に対象と関わりながら思いや願いを膨らませ、活動での気付きと生活経験、学習経験をもとに活動の見通しを確かなものにしていく姿が、「思いや願いをもって対象と繰り返し関わる」姿である。

(2)「身近な生活に関する見方・考え方を生かして試行錯誤する」とは

「身近な生活に関する見方・考え方」とは、これまでの学習経験や生活経験で得た知識・技能や気付きのことである。自分の思いや願いを自覚した子供は、自分の思いや願いを達成しようと、対象への働きかけを更に繰り返す。「身近な生活に関する見方・考え方を生かして試行錯誤する」とは、問題解決の過程でより強い願いや新たな願いをもった場面で、これまでの知識・技能や気付きを比較したり関係付けたりしながら試行錯誤し、気付きが増え、問題の解決の糸口を見付けることである。

先の事例では、「ぼくが登れるようになった登り棒の高さは何mなのか」と疑問をもった子供は、初めは「ぼくの登り方で12回分」と測っていたが、自分の生活経験から、運動会で先生が使っていたメジャーを使うと解決できると考えた。また、「どうして理科室にたくさん石があるのか」を疑問に思った子供は、保健室について調べている子供が養護教諭に質問していた様子から、「理科室だったら誰に聞くのが一番良いか」を考え、自分が頼りにしている6年生に質問した。このように、子供が、自分の思いや願いの実現に向けて、気付きや経験を結び付けて問題解決の糸口を見付けながら、自己決定、問題解決を繰り返す姿が、「身近な生活に関する見方・考え方を生かして試行錯誤する」姿である。

(3)「自分のよさや可能性を見いだす」とは

自分の思いや願いの達成に向けて自己決定、問題解決を繰り返す中で、問題を乗り越えたことを実感し、喜びを感じることが大切である。自分の活動の過程とその結果を受け止め、自分の頑張りやよさに気付くことで、自分に自信をもったり次の課題に挑戦しようとする意欲をもったりすることができる。

先の事例で、自分たちなりの問題解決を繰り返し、たくさんの発見があったことに手応えを感じた子供たちは、2年生への問題を作り始めた。「きっとこれは2年生も知らないぞ」ということを問題にしていく子供の様子から、自分たちの活動に満足し、自信をもっている様子がうかがえた。そして、2年生に堂々と発表したいと何度も繰り返し問題を出す練習を行う姿が見られた。2年生との交流後、2年生から「すごい。ぼくたちが知らないことをいっぱい調べたね」という称賛の言葉をもらい、さらに自分たちの取組に自信をもち、満足している様子であった。このように、繰り返し対象に関わり試行錯誤して活動してきた自分に気付き、自分の活動の有用性や自分の頑張りから自分の問題解決に自信をもつことができる姿が、「自分のよさや可能性を見いだす姿」である。

2 深い学びをする子供を育てるには

(1) 子供が問いをつくるには

「問い」とは、子供が本気になって解決したい願いであり、また、その願いに向かい試行錯誤する過程において解決したい問題のことである。そのような問いをつくるためには、子供が学びがいを感じ、繰り返し関わりながら夢中になって活動できる対象を教材にすることが重要である。対象との関わりの中で見付ける変化や違い、自分の願いと実際との違いが、子供にとって切実な問いになっていく。そのために、子供が対象と繰り返し関わる中で、どのような問いが生まれてくるか教材研究をしっかりと行い、子供の問題解決活動を構想し、子供の活動の拠り所となる単元名や副題を工夫する。

(2) 子供が自ら問いを解決していくには【重点】

① 多様な活動、試行錯誤を保障し、自己決定する場を位置付ける

自分の問いの答えは、子供が自ら見付け出していかななくてはならない。そのために、さらに対象に関わったり、友達と関わったり、自分で調べ活動をしたりするなど多様な活動を保障する。同様に、失敗してもやり直したりやり方を変えて挑戦したりできるなど試行錯誤しながら問題解決を図る機会を保障する。そうすることで、自分の生活経験や学習経験を総動員しながら、また、友達の活動や考えを参考にしながら、自ら納得できる答えを獲得していくと考える。その際には、教師が意図的に活動を仕組んだり、資料や材料、見本を提示したりするなど、子供の問題解決をしっかりと想定して、手立てを講じる必要がある。

また、子供が、自分の問題解決の場面において自分の責任で決定する場を、しっかりと位置付ける。その自己決定では、自分の問いの解決のための自分なりの見通し、予想をもって試行錯誤を行う。なぜ、その方法で解決しようと思ったのかが重要になる。その理由を大切に、支援をする。

② 自分の気づきを表出し、気づきを自覚できる支援を充実する

①の多様な活動、試行錯誤の中で、子供は多くのことに気付いているが、活動に没頭するあまり、子供自身が自らの気づきを自覚していないことが多い。そこで、「なぜこうしようと思ったのか、どんな気持ちか、これからどうしようと考えているのか」などと思いや願い、考えや気づきを言葉、絵、具体物に表現する場を設ける。このような体験活動と表現活動を繰り返すことで、気づきを自覚し、活動の質を高め、それが自らの問題解決につながる。

その際には、子供がどのような追究の状態にあるのかを的確に見取り、適切な支援につなげる。教師の言葉かけやコメントは、気づきの自覚化、気づきの質の高まりには効果的である。活動自体のよさをほめ自信をもたせたり、気づきが明らかになるよう問い返したり、さらなる思考を促したりするなど、子供の問題解決に有効な支援を行う。

③ 互いの考えの異同をはっきりさせ、気づきを可視化する

伝え合いの場では、気づきの違いや視点の違い、考え方の違いを明らかにしながら互いの考えを伝え合い、理解し合う。それぞれの思いや願い、気づきを全体に広めながら、共感する点や新たな視点を見いだすことで、集団としての学びを深めるだけでなく、一人一人の気づきを質的に高めながら問題解決へとつなげる。違いを明確にするために、言語以外に、再現、具体物や写真の提示など、視覚的に伝えることが大切である。教師は、子供が新たに気付いたり、友達の考えとつなげて考えたりできるように、キーワードを提示したり写真等を提示したりするなど工夫して板書を構成する。

(3) 子供が自分の高まりを実感するには

子供が自分の高まりを実感するには、まず、自分の問題解決を充実させることが大切である。その問題解決の過程を自分で実感できるように、教師は次の手立てを講じる。

① 自己評価によって変容を表現する

活動の振り返りでは、視点を明示し自己評価する。ネームプレートやシール等で自分の思いや願いを表出することにより友達との判断の違いを可視化し、友達の活動と比べたり友達の活動の様子や意見を聞いたりしたくなる場を設定する。

② 表現活動の記録を積み上げる

活動ごとの振り返りや自分の問題解決の過程での表現活動の記録を積み上げていくことが大切である。それらの記録を見返すことで、問題解決のヒントになったり、自分の変容を自覚したりできるからである。特に、終末の場面で活動を振り返るときには、その積み重ねが活動の実感として目に見えて分かり、自分自身の変容も分かり、活動の充実感を味わうことができるのである。